

の絵を習った(『東京美術学校旧職員履歴書』)というから、右の記事は
時的には符合するが、果たして真相はどちらであろうか。

それはさておき、正木直彦によると、正木は一雅が彫刻を陶器に
応用して見たいと言っているのを聞き、パリでロダンの彫刻を原型
としたセーブル製の「アーブル市の歴代の市長の像」や「童話作家
のフェヌロン」陶像を見て陶像こそ日本の庭園や建物に調和すると
考えていた折りから、一雅をセーブルに留学させるとし、清浦
農商務大臣に頼んで一雅を同省実業練習生としてフランスへ送っ
た。一雅は前出履歴書によれば明治三十六年二月に一旦助教を辞
し、同年四月十八日留学の途につき、同年六月から十月までパリの
アカデミー・ジュリアンで「画家フェリ氏」および「彫刻家ベルレ
氏」(昭和三十年版『日本美術年鑑』では「サンドーズ氏」)に師事した
と、十一月セーブルの国立陶磁器製造所に入所。三十九年七月に帰
国した。その間、三十八年八月には彫刻術研究のためベルギー、オ
ランダ、ドイツ、イタリアに旅行し、同年九月からオーギュスト・
ロダンに師事した。一雅がセーブルで作った動物を主題とする白磁
置物の原型はフランス人に変容されたらしい。正木の前掲書や
「沼田一雅氏の窯芸術につき」(『東京美術学校校友会月報』第十四巻第
五号)によれば、一雅はそのために帰国の際フランス政府から勲章
(『アカデミー・ドゥ・オフィシエ』勲章。前出『日本美術年鑑』には明治四
十三年授与とある。)を贈与されたという。

帰国後の一雅は雇として本校に復職し、校内に小規模の窯を築い
て制作を試み、傍ら農商務省工業試験所嘱託となり、陶磁彫刻の指
導に当たった。明治四十年十二月教授に昇格。塑造を指導した。彼

の陶磁彫刻の技術自体は本校の教育上には十分活用されなかった様
子である。大正十年から十一年にかけて再びセーブルで研究し、フ
ランス政府から「オフィシエ・ドゥ・ランストリユクシヨン・レピ
ュブリック」記章、「シュバリエ・ドゥ・ラ・レジョン・ドゥヌー
ル」勲章を贈られた。昭和八年教授を退官し、引き続き同十九年ま
で講師として在職している。

一雅の陶磁彫刻技術が初めて十分に発揮されたのは、晩年、京都
の国立陶磁器試験所の技師となり、大きな窯を自由に使えるようにな
ったときで、一雅は等身大の正木直彦陶像を制作し(昭和十一年)、
本校に寄附した。現在正木記念館に安置されている像がこれである。

④ 女生徒養成に関する建議

本年四月の新聞各紙に標題の記事が掲載されている。例えば四月
二十日の『報知新聞』には

○東京美術學校と女生徒 岡倉〔寛三〕前校長時代に物議の爲め
立消と爲りし同問題に付現校長正木直彦氏は時期既に到りしとし
て此程女生徒養成の意見を具し文部大臣に建議したり 左れど當
局者中には校規紊亂を招くの基なりとて反對の意見を有せるもの
もある由なれば中々容易には實行に至るまじと

とあり、同日の『東京朝日新聞』には

○美術學校女生徒養成の議 上野の東京美術學校に於て女生徒を

養成せんと議は岡倉覺三氏校長時代よりの宿題なるが正木校長は愈女生徒養成の意見書を認め文部大臣へ建議せり 尤も當局者中に反對論者多き由なれば實行されんことは餘程困難なるべしと云へり

と記されている。この建議書の内容は不明であり、また、年報の「将来必要ト認ムル件」の項にも本件に関する記載が無いが、右の報道が事実であるとすれば、少なくともこの頃本校側には女生徒養成の意志があつたことがわかる。

⑤ 入試課目改正

明治三十三年十二月の規則改正により翌三十四年から仮入学制度が実施され、以来、入学者選抜方法は

一、仮入学（無試験で入学させ、三ヶ月後に実技試験を行い、合格者を予備の課題へ入学させる。）

二、競争試験（合格者を直ちに予備の課程へ入学させる。）

の二通りとなつた。二の場合の試験課目（76頁参照）には学科と専門実技とがあつたが、同三十六年に至り学科が廃止された。したがつて、本校ではこれ以後入学試験は実技試験のみとなつた。

⑥ 東京美術学校參觀記

○上野の若葉 昨日久々に東京美術学校を訪問致候 幸に彫刻科教授黒岩淡哉氏出勤中にて參觀の便を得たり 同氏は先に佛國大博覽會に自作を出品して金賞を得られし人に候て亦今回大阪に

開設せる第五回博覽會美術館前噴水楊柳觀音には熱心に力をいたせし青年彫刻家に御座候 氏語て曰ふ 本校の夏季休業は例年七月中旬に始まり九月中旬を以て終る規定なれ共本年は博覽會の爲修學旅行として去る十日より休業 學生には關係之助羽田禎之進の兩氏附添ひ既に奈良を経て大阪に向へり 尙ほ下村觀山、白井保次郎、櫻岡三四郎の諸氏は英に佛に米に留學中にていと淋しく當時校舍は明店の感あり けれども日本畫教室に（マ）に本年度の卒業製作並に競技成績の陳列しあればイザ案内せんと玄關正面の階上日本繪畫科（マ）第四年教室に導びかる 教室の廣さ約四十四坪 玆に甲種四五乙種二五の競技成績の陳列を見る 競技の畫題は艷麗題意を妙齡の婦人に借りしもの多く山水、花鳥は稀なり 甲種の分にて小西義雄、松岡輝夫、長峰虎雄（發良雄）、植松盛之助、佐治友八、小泉勝爾を始め見る可きの作多し 元來競技は課題艷麗の元に本科三年以下豫科（豫）選科を通じて製作競技せしもの 豫科にて合格せしは小泉勝爾あるのみ また望を囑す可き？

順次別室に本年度の卒業製作を觀る 製作枚數十四 總て三尺巾と見受く 百花爛熳（漫）たるこみちに露をいとえる唐美人 さては平家の都落ちとでも題す可き横もの 兩者共に佳作とす 只惜らくは前者は骨格描法に注意の足らざるなきか 然れども周圍に於ける苦心はよく此のピカを許す可く以て全面を貶するに足らざる可し 後者は水墨を以て後景二三の人影を現はす 筆者も定めし遠近を取らん意に外ならんも其はなくもがなにて前景既に線を施し密なる彩色を加えし人物と甚はだ調和を欠けり 是れを昨年の成績に比して進歩上雲泥の差あり 誠に人物畫に於ては驚く可